

大学 出版

2002.6 No.53

夏

ブルースの四季——夏 ■ 湯川新 ——表2

特集*生涯学習究 大学出版部行き

日本の大学公開講座 ■ 瀬沼克彰 —— 2

教材活用の実態から ■ 阿部賢典 —— 7

大学の価値は上がるか

—— 広報機能からみた公開講座 ■ 近藤真司 —— 11

出版部と生涯学習事業がめざすもの ■ 高野修司 —— 15

科学する目6 騙しのテクニク ■ 青木淳一 —— 18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 川越「小江戸」散策 —— 20

大学出版部ニュース —— 22

製作の現場から 28 —— 32

デジタル出版最前線 6 —— 表3

大学と社会を結ぶ知のネットワーク



大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

ブルースの四季 害虫の歌

夏

・湯川 新・



一九二〇〜三〇年代のブルース歌謡には多種多様な動物が登場する。動物たちは、おおむねは男と女の性的魅力を誇張した比喻である。雄牛、雄山羊、ぶんぶん蜂、黒蛇などは男性で、雌牛、乳牛、猫、豚、雌鳥などは女性である。だが、それ自体として主題化される動物もあって、それらが、蚊、南京虫、ポー・ウィーヴィルなどの害虫であった。

昨夜スプレーを買って、家中に噴霧した／入り口は蚊だらけで、誰もなかに入れない（フラインド・レモン・ジェファーソン）。南京虫は悪魔、ひどいことばかりする／あいつが啄木鳥であたしが木の幹みたいだ（ベッシー・スミス）。小さなポー・ウィーヴィルが飛んでいる。／綿花を植えても、半セントにもならないよ（チャーリー・パットン）。

なかでも好んで歌われたのが、南部の主要農作物たる綿花の害虫、ポー・ウィーヴィル（*Anthonomus grandis*）である。成虫で体長三〜五ミリ、綿の蕾に産卵し、成虫はその葉を幼虫はその蕾を食する。三月から十二月までの一綿作期に四〜五世代交代する。一八九二年にテキサス州に登場し、一九〇七年にミシシッピ州ナッチェスで農業検査官によりその存在が同定され、数年後には南部諸州の綿花地帯全域にまでその被害が広がった。第二次世界大戦後、塩素炭酸化水素系の殺虫剤の開発によって被害が縮小したが、現在でも例年合衆国の綿花作物の八％が壊滅させられて

いる。無論、この時期、この虫が「害虫」となったのは、南北戦争の動乱が収まって、綿花がプランテーションの粹組みのもので、巨額の利潤を生み出す換金作物として大量に生産されるようになったからでもあろう。十八世紀末に紡績機械が発明されて木綿が日常着の基本となり、原材料の綿花に大量需要が生じていたのである。布地の生産は機械化されたが、綿花の生産の機械化は困難で、とりわけ綿摘みは手作業に依存する。米国では、この労働力の主体は小作人の黒人たちであった。ブルースにこの害虫にまつわる歌謡が多いのは当然かもしれない。

しかし、歌手たちはこれを単に害虫として退けてはいない。迷惑だが何処に行つても出くわしてしまう仲間、かよわく見えてとんでもないことをやつてのける怪物として擬人化される。新しの殺虫剤にめげずに増えまくり、自由気ままに飛び回るこの虫はときとして賛嘆の対象ですらある。ブルースマンの過半は農業労働を嫌悪した人々だからこうした害虫の歌が生まれたのだろうか。農業自体が、刈り分小作制度のもとでは黒人層にとって過酷にすぎ、成果の乏しい労働であったためにかかる歌謡が芽生える素地があったのだろうか。ともあれポー・ウィーヴィルは、ブルースの世界では南京虫や蚊とは違い、けつして恨みの対象にとどまらない虫なのである。

（ゆかわ・あらた／音楽社会学者）

特集

生涯学習発 大学出版部行き

生涯学習は一九六五年にポール・ラングロン（当時、ユネスコ成人教育局）が提唱したことにより、世界に広がる概念となりました。大学における生涯学習事業といえば、公開講座が代表的なものです。日本の四年制大学六九九校、短大四九九校の約八割が何らかの形で開講しています。

いまやこれだけ大学に根づいている公開講座も、収益を上げているものはそのなかでもほんのわずかです。ほとんどの大学は学校経費の持ち出しにより成り立っているのです。それでもなぜ大学は生涯学習事業に取り組むのでしょうか。

私も大学出版部の立場からみると、大学公開講座は、大学の社会貢献的役割、収益性・広報性の可能性を担う事業という点で、非常に近い存在にあります。

今回の特集では、大学における公開講座の実態を把握し、モデルとすることから、大学出版部が学校組織とのかかわりのなかで、どのような可能性をもっているのかをみてみたいと思います。

日本の大学公開講座

瀬沼 克彰

(桜美林大学生涯学習センター長・教授)

大学を社会に開く公開講座

大学公開講座が世の中で注目されるようになってきた。かつて新聞や雑誌がこの問題で特集をすることはまったくなかったが、近年、マスクミがしばしば大きく取り上げられるようになってきた。その理由は、学歴に代わって社会人になってからの学習歴が大事になってきたこと、職業生活や家庭生活を充実させるために学習が不可欠だと、多くの人が考えるようになったことなどが考えられる。

一方、提供者側の事情として、一八歳人口の急減に悩まされている大学は、生き残るために、増えつづける中高年者を大学に受け入れたいと考えている。需要者の要求と提供者側の考え方は一致して、大学を社会に開く一戦法として、公開講座が最も着手可能である。

本稿では、公開講座のこれまでの歴史・現状における公開講座の実態を述べて、これからの方向性について示唆してみたいと思う。大学公開講座は、わが国において、まだまだ

スタートしたばかりで、本格化するのはいくらかのことといえる。

公開講座のこれまでの歴史

欧米における大学公開講座の歴史は古い。大学公開講座などの生涯学習事業を包括する概念として、「大学開放」(university extension)があるが、大学がもっている教育資源を学外に開放しようというこの組織的な試みは、一九世紀のイギリスで始まった。ケンブリッジ大学のフェロー、J・スチュアートが特権階級に占有されていた高等教育を一般開放する目的で、一八七三年にケンブリッジ大学の講師を全国各地に派遣して、一般民衆に拡張講義を行った逍遙大学がその初めといわれる。

さらにアメリカはイギリスの影響を受けて、ハーバード大学、エール大学が二〇世紀に入って公開講座をスタートさせた。アメリカでは「通信教育、サマースクール、拡張

クラス、夜間大学、宿泊制教育、各種研究会、印刷・出版事業、図書および視聴覚教材の貸し出し、放送教育、その他各種の機関や団体等への知的援助活動」などの形態を加え、独自の大学開放をつくりあげた。さらに、高等教育の開放を「社会貢献」に位置づけ、大学の担うべき「第三の機能」として定着させていったところに特徴がある。

このように欧米は、一〇〇年、二〇〇年の歴史をもっている。

一方、日本の公開講座はかなり遅れて、いまから二〇年前に早稲田大学エクステンションセンター、上智大学コミュニケーションカレッジがスタートしている。大学の社会的役割は、学生の教育、教授スタッフの研究、社会サービス（社会貢献）の三つであるが、日本においては、社会サービスの考え方が遅れていて、近年、ようやく活発化してきた。

公開講座の四つのステージ

私は、一九九一（平成三）年に日本の国立大学として生涯学習センター第一号である宇都宮大学に勤務したこともあって、社会的サービス問題にこれまで関心をもって調査研究を行ってきた。大学公開講座の歴史を類型化して、以下の四つのステージに分類してみた。

①片手間仕事型（教務課、庶務課などがメインの仕事で、年に数回公開講座を開催）

②依存仕事型（名前だけは教務課、庶務課から独立した

担当者を置いたが、講座数は小規模）

③独立型（専管セクションを置いて、独立した事務組織をもっている。国立大学二〇校、公立大学一二校、私立大学五〇校）

④大規模型（専管セクションが充実し、収益を目的とした事業を行っている）

この十数年を振り返ってみても、①から②へ進むことはまことに少ない。①のステップの大学は一〇年経過しても一五年が過ぎても、八割を占める①のステップの大学は変化をみせない。②から③、③から④への発展ということも、それほど目立っていない。一八歳人口の急減に対して、増大する社会人や高齢者を大学に迎え入れるという手法は、簡単に取れないのである。

大学の社会的サービスは、本来、大学教育の時間的・空間的拡張として、正規授業の開講が望まれるが、実際には社会人、高齢者のニーズに適合するように再編成して提供している。その意味では、飲みにくい薬をオブラートにすることで、飲みやすくしたプログラムという表現もできるだろう。

現状では、③の生涯学習センターがこの数年の間に、特に私立大学で増加していることは注目に値する。旧文部省から委嘱された調査に参加して、実態を把握したことがあるが年間予算規模で見ると、五〇〇万円未満（二二％）、一〇〇〇万〜三〇〇〇万円未満（二二％）、五〇〇〇万〜

一億円未満（一三％）、一億円以上（七％）という割合であった（日本生涯学習総合研究所『大学の生涯学習センターについての調査』二〇〇〇年）。いずれにしても、予算規模は、きわめて小さいのである。

受講者数は七九万人と増えている

予算でみると、まことに大学経営に寄与することは少ないが、文部省（当時）の統計をみると、カルチャーセンターに比べて伸びは大きいように思う。講座数、受講者数の経年変化をみると、一九八六（昭和六一）年では、二五〇〇講座、三八万人、一九九五（平成七）年、八三三六講座、六四万人、二〇〇〇（平成一二）年、一万三〇〇〇講座、七九万人と増加している。

公開講座の講座数は、国立（一四三七）、公立（八一四）、私立（一万七九四）と圧倒的に私立が多い。受講者についても、六万人、六・三万人、六六万人と私立が八割以上を占めている。講座の内容は、表1のように多い順に並べると、一般教養（二九％）、現代的課題（二〇％）、専門・職業（一八％）、語学（一七％）、趣味（一二％）、スポーツ（五％）とつづいている。

このなかで、現代的課題が第二位になっていて難しい内容のようにみえるが、そういうことなく、分類上の項目が実現されているので、やや目立っているということである。受講者の対象ということが、これから新しい講座

表－1 公開講座の内容

区分	専門・職業	現代的課題	一般教養	語学	趣味	スポーツ	計
国立大学	講座 408	講座 391	講座 295	講座 57	講座 179	講座 107	講座 1,437
公立大学	163	311	246	57	6	31	814
私立大学	1,716	1,843	3,221	2,118	1,366	529	10,794
計	2,287 (18%)	2,545 (20%)	3,762 (29%)	2,232 (17%)	1,551 (12%)	667 (5%)	13,045 (100%)

注：平成12年文部省調査

を開設するにあたって重要になってくる。しかし、これも集計上、一般人というくくり方をしていて八七%を占めている特定職業人（四%）以外では、男性のみ・女性のみ、小・中学生・親子・高校生などすべて一%という数値なので、対象の正確な割合は読みとれないで残念である。

公開講座は、数的には伸びてきて、年間一〇〇万人の受講者を獲得できる力がついてきたように思う。しかし、前述のように収入面で一億円を超えているのは、数校にすぎない。それは一人当たりの受講料が高く取れないためである。一般学生の授業料は文科系でも年間一〇〇万円に達するが、公開講座の受講料は年間五万円程度で、どんなに高くしても一〇万円を超えることはほとんどない。

一人当たりの受講料を高くすることができないとしたら、人数をたくさん集める以外に方法がない。わが国の場合、一万人以上の受講生を集めているのは、早稲田大学・上智大学・昭和女子大学などきわめて限られている。アメリカも大学経営は、厳しさを増している。授業料収入も伸びないし、州からの補助金は年々減少している。そこで、州立大学のサブイバル戦略として、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のように、公開講座を五〇〇〇講座に増やして、一〇万人の受講者を抱え、日本円にして三〇億円の収入を確保した。

公開講座で収益を出して、それを一般学生の学部教育にまわしている。アメリカの州立大学は、こうした経営方法

で生き残っている。また、東部の有名私立大学は、ビジネス教育、ロースクールによる短期集中型の高額なセミナー料で収益を出して、学部教育の助けにしている。わが国においても、一八歳人口は一九九二（平成四）年のピーク時二〇五万人が、現在一五〇万人に減少し、二〇〇七年には一三〇万人になる。大学生生き残りのためには、おそらくこれらの作戦以外に道はないと考えられる。

大学生生き残りに寄与できるか

そこで考えられるのは、薄利多売のカリフォルニア方式をとるか、ハーバードやエールのような高価値付加の少人数型でいくかの選択ということになる。わが国の大学は、これまで前者の手法を採用して、一万人の受講生を集めることに力を入れてきた。しかし、一人当たりの受講料が低いので、どうにも収益は伸びない。

一方で、コストは、教室の使用料、PR宣伝費、講師料、事務のタックス人件費など、年々増加していく。大学公開講座で、黒字を出しているようなところはきわめて限られている。カリフォルニア方式は、わが国の場合、競争相手が多すぎて、一つの大学で一〇万人の受講生を集めるといふことは至難なことである。

競争相手として考えておかなければならないのは、公民館、公立生涯学習センターなどで、ここでは現在でも受講料が無料で教室を開催している。また、新聞社やテレビ局

表-2 サテライト・キャンパス開設状況

区分	全大学数	開設大学数	開設予定大学数
国立大学	99	24	6
公立大学	74	5	4
私立大学	497	50	12
計	670	79	22

注：平成12年文部省調査

の営業するカルチャーセンターは、駅前ビルなどで交通至便の一等地で講座を提供している。大学は立地で負けてしまふことも少なくない。現在、大学の最もホットな戦略は、サテライト・キャンパスを開営することである。

文部省(当時)の調べによると、表2のように、二〇〇〇(平成一二)年時点で、国立(二四校)、公立(五校)、私立(五〇校)がサテライトを開設し、これから開設予定のところは二二校と出ているが、私の予測ではこの倍の数字は出ると考えられる。IT革命の時代だから、遠隔授業も十分可能になってきているにもかかわらず、人々は立地のよいところで教える側と習う側が触れ合って対面する、

アナログ志向がみられる。

IT時代のハイテクが求められると同時に、ハイタッチが重要になってくる。同じように、ハイテク機器を駆使した授業が求められるとともに、オールドメディアとしての出版物の大切さが求められる。学術書を使った考える授業、論文作成が必要になる。

これからの大学公開講座を予測してみると、二極化の方向が続々と出てくるであろうと思う。受講生の量の獲得に力を入れる大学と、少数の人に対して大学院レベルの専門教育を行う大学である。この場合、受講料は一回五万とか六万円という値段で、一〇回分を取るという方式である。

先日、ある新聞社主催の講演会で、多摩大学の中谷巖学長(当時)が話していたが、本年から渋谷駅の駅ビルでそうした公開講座を開催するという話であった。

私も新宿サテライト教室で、二〇〇一年から大学院レベルの公開講座を開講している。単位を出せる科目は、受講生も集まるが、そうでない科目の受講生集めには、本当に苦労している。二つのどちらの方法を採用するにしても、企画・運営を円滑にこなせるスタッフを育成しないことには、運営の成功はおぼつかない。人材育成が急務だと思えてならない。

教材活用の実態から

阿部 賢典

(大学公開講座研究会相談役／前・昭和女子大学オープンカレッジ学院長代理)

大学公開講座、千差万別の規模

わが国で「生涯学習」という言葉が脚光を浴びるようになって、もうほぼ二十年以上が経過した。「生涯学習とは学校教育から社会人学習まですべての学習活動を包含するマスターコンセプト」とされている。この生涯学習の定義からすれば、大学公開講座もまた、「生涯学習活動の一翼を担う」学習活動のひとつということができよう。

一口に「大学公開講座」といっても、その実態は所属大学の規模、考え方(建学の理念等)によって千差万別である。内容はともかく、形態的にみても一年に数回の公開講座(講演会)、シンポジウム等を開催するだけで「大学公開講座」と称するものもあれば、春・夏・秋・冬、年四期、通年開催、会員数二万人以上、数百という膨大な数の講座を開設して社会人に提供する「大学公開講座」もある。そのいずれもが「大学公開講座」であることには変わりはない。ただ、こうした規模・態様の違いが、大学公開講座の

教材活用の実態を考えるうえで、微妙な誤差を引き起こすことも否定できない。

そこで、本稿では、通年、数多くの社会人を対象とした講座を開設している大学公開講座を念頭におき、その教材活用の実態を書籍教材(コピー利用による教材を除いて)を中心に報告することにした。

教材・テキストの決定は基本的に担当講師一任

大学が(それが大学自身の教学の一部門であることもあれば、独立したオープンカレッジ、エクステンションセンターの場合もあるが)さまざまな社会人を対象とした「公開講座」を企画・設定し、広く一般から受講生を募集する。当たり前のことだが、企画される「公開講座」の講座内容とそれにかかわる教材・テキスト(以下、教材)とは不即不離の関係にあり、教材に関する事項だけが分離独立して企画・設定されることはない。講座内容が決まり、担当講

師が決まれば、教材は担当講師の意志と知識によって自動的に決まる。教材の決定に公開講座の企画セクションの意向が加わることがあるものの、基本的には担当講師の意志に任されるからだ。したがって、公開講座の担当セクションの教材に関する実質的な仕事は、担当講師によって教材が内定したところから始まるといつてよい。

つまり当該大学の公開講座企画セクションが決定するのは公開講座の内容であり、それにかかわる教材ではない。ただ、そうはいうものの教材の選定には、自ずといくつかの基本ルールがある。たとえば、通常、教材には当該講座のすべてを包含したいわゆる研究書に類するものと、基本事項を盛り込んだ教科書に類するものの二種類があるが、大学公開講座で使用する教材は文句なしに後者である。公開講座は、たとえ通年講座であっても、申込単位は三カ月一クール。したがって、教材はこの申込単位に連動するものが好ましい。講座の申込単位(三カ月)が修了しても教材に未了部分が残るようであれば、受講生には大きな不満が残る。「いつでも自由に学べる」公開講座の教材の選定にあたって、こうした配慮もかなり重要である。つまり、受講生に無駄な教材を買わされたという不満を残してはならないのである。

閑話休題、公開講座の企画セクションは、当該講座の教材が内定すると、その教材の版元在庫が充分かどうか、希望数量が確保できるかどうか、現在の定価はいくらか、定

価の割引ができるかどうか(たいていの場合、一〜二割程度の割引はOKされる)、別途宅配料が必要かどうか、発注から到着まで何日くらい必要か、余剰が出た場合の返品が可能かどうか等を版元に問い合わせ、購入予約協議をして一覧表を作成する。担当講師が採用を決めた教材がすでに絶版になっている場合や、定価が講師の持参した見本とまったく違っている場合も少なくない。担当講師の提示した教材にこうした不具合が発見された場合には、当然、教材の変更が要求される。こうした作業は当該期の講座案内・パンフレット(以下、講座案内)の編集過程と連動して進めなければならず、かなり忙しい作業になる。ただこれらの作業をどれだけ綿密に行おうと教材の正誤(ミス)がゼロになることはない。講座案内の編集作業が講座開設の半年以上前から始まるのが大きな原因だ。受講生の募集期間が二カ月、講座案内の編集が二カ月、講座の企画期間が二カ月以上必要なことを考えれば、やむをえないことだといえないこともない。しかし、この教材の正誤発生が受講申込受付のうえで大きな障害になることも避けられない事実である。

教材決定のさまざまな様態

講座に使う教材の決定は「担当講師の意志と知識に任される」といったが、これには「基本的に」というフレーズをつけたほうが正確である。というのは、教材の決定が担

当講師の意志と知識に一〇〇％任されるのは、文芸・教養、一部の語学講座など、いわゆる講座物の講義に限られるからである。

通常、「入門」「初級」「中級」「上級」などのステップアップを前提とする英会話講座は曜日・時間別に各ラングごとに十数クラスが設けられており、それらのクラスでは同一の教材を使用する必要がある。したがって各ステップで使用する教材は、あらかじめ講座担当セクションで決定しておき、講師自身の意向にかかわらずなく講座セクション指定の教材を使ってもらうことになる。私たちも公開講座設立当初は各クラス別に担当講師に自由に教材を選んでもらっていた。だが、そうすると同一レベルのクラスでありながら、教材の進度に大きな開きが発生し、受講生から大きな苦情が出た。現在は「入門」から「上級」などのステップアップ英会話講座では、指定した教材で講義してもらっている。

ただし、ステップアップを前提としない英会話講座（「中学英語を学び直す」等）、特定の狙いをもった英語講座（「ビジネス英会話」「旅行英会話」等）、その他の語学講座（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語等）の教材の採否は、担当講師の自由な判断に一任されている。前述の通り、社会人講座の開講期間は通常三カ月一クールで構成されているが（通年講座でも開講期間一クールは通常三カ月単位、一期一〇回クラスが多い）、受講生のな

かには、次の三カ月も同じレベルのクラスを選択受講するケースが少なくない。いわゆるラセン型学習だが、こうした復習に次ぐ復習学習もまた社会人学習の大きな特徴のひとつといえる。このあたりが社会人学習のおもしろいところで、受講生は習熟度別学習を自らに課しているわけである。この場合、当然ながら、教材の新たな需要は発生しない。つまり、当該講座の受講生数と教材の必要数とは必ずしも一致しないことになる。

資格取得講座は専門校に丸投げ

今日の「大学公開講座」のなかで大きなウェイトを占める資格取得（準備）講座の教材の取り扱いも通常講座のシステムと大きく異なる扱いとなる。往年は大学教員による講座が多かったが、何しろ資格取得（準備）講座は関係する法律も多種多様、経済、業界のシステムも多岐にわたるものが多く、単一講師による講義内容では到底受講生の満足を得られなくなってきた。また受験対策講座となれば、大学の教員による講座より、実務専門家による講義のほうが受講生の要望を満足させられる度合いがはるかに大きい。今日ではいずれの大学を問わず、資格取得（準備）講座は資格専門校（TAC等）との提携講座が主流を占めるようになってきた。そうなれば当然、当該講座の教材は派遣専門校の教材を利用することになる。つまり、この場合には教材だけではなく、講義内容、担当講師すべてが一体とな

った講座連携といえよう。このことは「大学公開講座」のもう一つの主力である情報処理講座、IT関連講座において最も顕著に現れている。IT関連講座の場合には、講座内容、担当講師、教材だけでなく、教室の設備機器を含めて丸投げする講座が増えてきた。かつては大学の理念からいって、公開講座といえども講座内容、担当講師、教材、教室の設備機器まで一括して委託してしまうなどということとは考えられなかったが、今日ではこれがごく当たり前のことになってきている。こうなると「大学公開講座」ではあっても、大学の関係者が直接かかわるのは受講生の受講申込（受付）だけとなるわけで、一八歳人口の減少のなかで新たに加わった問題提起といえなくもない。当然、当該IT講座の教材も担当専門校のテキスト（自主製作）の採用となるわけである。

教材の調達方法への工夫

大学公開講座の教材を考えるうえで忘れてならない事項のひとつに、これらの教材をいつ、どのような形で調達しているだろうかという問題がある。講座の開講が決まる、教材を用意しなければならぬ、何人分の教材を用意すればよいのか、当該講座の開閉講は、おおむね講座開始日のほぼ一週間前までに決定するが、講座開講となれば、開講直前まで、大学によっては開講一週間後くらいまでも受講生を受け入れる。教材管理の立場からいえば、できる

だけ早い時期に受講生数、教材の需要を確定したい。他方、講座を開講する以上、できるだけ多くの受講生に講座を受講してもらおうという「教育サービス」の考え方に立てば、受講生数の確定を開講日ギリギリまで延ばしたい。いずれを採るべきか、この整合が実に難しい。

当該大学に書籍販売部門をもつ「大学生協」があれば、その組織と連動発注するのがベストであることはほぼ疑いを入れない。だが、こうした書籍販売部門をもたない大学の場合は実に悩ましい。公開講座開設当初、私たちはさまざまな方法を模索した。当初は大学入りの書店を利用したが、ギリギリまで受講生数が確定しない、しかも講座単位で見れば必ずしも注文数が多くない公開講座の教材発注を見切る場合、この方法は必ずしも適切ではなかった。特に返品の手当が難しかった。

平成の初期には教材の発注で本当に苦労させられたが、今日ではアマゾン・コムの活用でほぼ安定した供給が可能になった。アマゾン・コムは割高だという意見もあるようだが、在庫が豊富なこと、返品が可能なこと、インターネットで在席のまま発注が可能なこと等数々の利点がある。アマゾン・コムは個人精算を原則にしており、カード利用には若干の工夫が必要だが、アマゾン・コムの登場で大学公開講座の教材発注の悩みはほぼ解消したといえる。IT（情報革新）はここでも確実に大学公開講座の発展に寄与している。

大学の価値は上がるか——広報機能からみた公開講座

近藤 真司 (財全日本社会教育連合会「社会教育」編集長)

「公開講座」の情報発信

都内、関東近辺で電車にのると「大学」の広告を目にしない日はない。「中刷り」広告、「棚上」広告には「公開講座」の広告が並ぶ。

ここで提案したいのは「個性」の發揮である。

公開講座の意味は、その存在を社会に広めることにある。そのためには情報戦略が重要だ。「社会」に知ってもらうには「広報」「広告」を効果的に行うことが大切である。

ではいま大学のもつ「学習資産」の公開・拡張をどのように行えばよいのであろうか。また「何」を「どのように」拡張すると大学の価値が上がるのか。それをどんな手段で行えばいいのだろうか。

少子高齢社会に移行したわが国では、大学の「マーケティング」の見直しが図られつつある。「一八歳人口予備軍」に対するマーケティング活動としての「大学から高校に出向く出前講座」を実施する高大連携、「スタディツアー」

はかなり具体化されている。

一方「社会人」に対するマーケティングはどうであろうか。六五歳以上のシニア層、四〇〜六〇歳の管理職層、二〇代、三〇代の流動層などに「大学」のメッセージが「ターゲット」に届いているのか。

大学の情報発信が社会人から「認知」される要因

一九九五年以降、ICT(情報コミュニケーション通信技術)時代に入った。これは「学習方法」「教育方法」を根本から変革する可能性を秘めている。

これからの「初等教育」の「教室」では、先生にインターネットにつながったパソコン一台、生徒側にインターネットにつながったパソコン一台、つまり最低二台は「外界」とつながった「学習空間」になる。大学は「教室」から「学習空間」に脱皮できるのであろうか。

ICT時代において、ホームページはもともと広報機能

をもつ媒体として生まれた。学習者にとってホームページは、そのものが「学習」の情報源である。情報化の進展は、インターネットを媒介として学習者に学習コンテンツを直接提供することを、可能にしている。個人としての学習者が、いわゆるブロードバンドの環境を整えることができれば（つまり、回線料金、コンテンツ料金を支払う能力があれば）、可能である。

早稲田大学エクステンションセンターで行われる「公開講座」を例早稲田大学ラーニングスクエア (<http://www.wls.co.jp>) では、ブロードバンドと衛星両者のプログラムにより、個人や全国の生涯学習センター、カルチャーセンター、高齢者福祉施設（まだ元気なシニアが入所する）等への配信を行っている。

文部科学省実験事業のエル・ネット「オープンカレッジ」(衛星通信を活用した「空」からの公開講座。受信は全国の二〇〇〇カ所の公民館等。約五〇大学が参加。エル・ネット「オープンカレッジ」<http://www.opencol.gr.jp>)のポイントは、「団体利用」の活用である。

「団体で学ぶ」ことにより、学習が個人ベースで行うよりも促進する可能性がある。お互い同士の議論、意見交換がなされる。決まった時間に集まる楽しみ、さらに受講後の人間的なふれあいが大切である。学習「同志」的連帯は、成果を社会に還元する可能性を秘めている。

講師と学習者が相互に「受信」「発信」し学習を深め、

その結果、人と人とのつながりが変わっていく。

社会人の求める生涯学習

いま、不況の風が吹いている。このため三〇代、四〇代のサラリーマンは「自衛」の必要にかられている。このため最小「コスト」で最大「効果」の出る「学習機会」を求めている。インターネットで仕事をする時代に入り、「大学の研究目的から開発された」インターネットが企業・ビジネスに最大限に活かされている。特に、リサーチに威力を発揮する。このリサーチに「大学」がひっかからないと「伝達」できない。仮にリサーチにひっかかって、「比較」される。学習内容、シラバスが詳しく、わかりやすすくないと「ユーザー」は納得しないのだ。「目線」を「社会人」に合わせる必要がある。

大学の本身である「知」の集積地としての機能は、わかりやすく表現する必要がある。「学習者」にやさしい「サービス」が必要なのである。学習のバリアフリー、ユニバーサルデザイン化が必要なのである。障害者、高齢者に使いやすい、わかりやすい、参加しやすい「公開講座」が必要なのである。

また、さきほど指摘したように、大学は「知」の集積地である。大学の教員が「知」をもつのは当然のことだが、職員にも「知」のセンスが必要だ。大学を知ってもらう、開放するには「教員」と「職員」が同じ土俵に上らなけ

ればならない。さらに相互に協力して「集積効果」を出さなければならぬ。大学はもはや「教員」の個人商店の集まりではないのである。相互の社会的能力開発にも自身の「生涯学習」活動が重要である。

私学では事務、情報化を共同の会社を設立して行おうという動きがある。共同で広報を行うメリットは単独ではできないことができることである。参考例として、東京二二大学広報連絡協議会 (<http://www.tokyo22univ.com>)、朝日新聞の公開講座紹介サイト (<http://www.asahi.com/openschool/>)、大学出版部協会 (<http://www.ajup-net.com>) などが挙げられる。

ホームページを活用した「総合的学習メニュー」の集積効果はコスト面で効果が期待できるということであり「収益性向上」に近づくことになる。

また、学習者にとっても多くのメニューがあるということは選択肢がひろがり、選ぶ楽しみ、比較できる楽しみをもつことでもある。

「公開講座」を新しいメディアと捉え直す

(1) 研究報告メディアとして

大学公開講座が知的な情報プロバイダーとして、他の領域の「知」（企業、研究所、博物館など）と手をつなぎ、大学の公開講座として、知識、知恵を世界に発信、他の領域とのネットワーク関係と協力的体制ができる可能性をもつ。

(2) 教育実施メディアとして

大学公開講座がeラーニング、WEBで活用可能な「教材」の研究・開発を行い、教員、職員等の研修（いま行われている講座・講義をどのようにリメイク、作り変えるのか、使いやすいものにするか）を検討する必要がある。

(3) 社会貢献メディアとして

「地域」の生涯学習の拠点として「地域に新しいかたちの学習集合体」、たとえば「〇〇大学公開講座友の会」の「掲示板」を大学生涯学習センターでWEB上に用意する。

大学の社会的意味の再確認

教育機関として自治体の社会教育やカルチャーセンターと比べての大学の優位性は、現状では施設と人材である。専門分野における講師としての人材をもっている。大学の劣位性は前者とうらはらではあるが、人材となるべき教員が生涯学習・公開講座に関心が高くないことである。

大学の組織としての意志決定に時間がかかりすぎる。ことまならないこと。総論賛成、各論反対に陥りやすいこと。リーダーシップの発揮ができる大学ほど公開講座、地域開放が進んでいる。

大学は地域社会の一員。その持てる資源を「公開すること」により、社会、地域、社会人から認知されることができ。社会人に近づく努力をしなければならない。社会人入学フェア等への参加、ミュージアムショップ方式・ブラ

ンド商品、生涯学習成果の商品化、公開講座受講生会員に対する会報送付、学習ソフトの開発、寄付講座（企業等）、資格講座の開設などが望まれる。

メディアと「学習」の意味——論点の整理

(1) 基本は「リテラシー」

読み解く力をつけるのが学習の本質。学習メディアに新
旧はない。大学の公開講座の成果を「かたち」に残す。

公開講座の成果を「本」にすることは重要である。一方
的「承り型学習」つまり、いいお話をうかがった、ありが
たや、ありがたや、では「大学」がやるべきものなのだろ
うか。「子ども」の学力低下をいう前に「大人」が本当の
学力があるのかを考えてみる必要がある。

聞きっぱなしではなく、「議論」し、調査し、考え、そ
の学習成果を「ポートフォリオ」（学習記録票）としてま
とめる。それを「本」にしていく「編集」機能が本当の学
力となる。

大学の公開講座での学習も「成果」に編集というプロセ
スを加え、学習成果をさらに「本」というツールを使い社
会に成果を問うていく、こんな投資「リサイクル」型生涯
学習、公開講座のプログラムを開発してほしい。

これは「自分史」講座ではない。「社会」を相手にする
ものとして最低限のレベルが求められるのは当然である。

また「良質」の公開講座の成果には奨学金というかたち

で「本」の編集支援を行うことも大切だ。

(2) 公開講座を「新しいメディア」と位置づける

現代のICT時代、学習成果の「書き出し」媒体が「本」
なのか「電子手帳」なのか「パソコン」なのか「携帯電話」
なかだけの問題である。「道具」としてのICTを活用
して大学公開講座を「拡張」し、大学がこれから求められ
る「社会貢献的役割」「広報性」を拡張しよう。

(3) 学習の拡張（エクステンション）の意味

学習のもつ拡張性とは「メディア」によって増幅される。
「情報」が集まれば集まるほど、さらに多くの情報が集ま
る。情報の集まるところには人材が集まる。人材が集まれ
ば「いい」講座を開催できる。「いい」講座は「いい」評
価を受ける。総じて「大学の価値」が上がる。

公開講座を上手に「メディア」として活用し広報するこ
とができれば、結果として大学の価値が上がる（大学の価
値の拡張）ことになるのである。

■参考文献

『社会教育』二〇〇二年二月号、「特集 大学」

『社会教育』二〇〇一年一月号、「特集 eラーニング」

以上（財）全日本社会教育連合会

出版部と生涯学習事業がめざすもの

高野 修司 (玉川大学出版部)

大学公開講座や大学出版部は、大学にとって収益事業であり文化事業である。だが、収益の点ではどちらも苦戦している現状にある。ではなぜ大学は公開講座を開催したり、出版部を設立するということを考えたのだろうか。

公開講座は収益を期待されていない？

一九九〇年に行われた全国の大学・短大で公開講座担当者を対象としたアンケート調査によると、大学が公開講座を実施する目的は、(1)社会的サービス(四・六点)、(2)大学のイメージアップ(四・四点)、(3)教育・研究の向上(三・八点)、(4)学生募集対策(三・〇点)、(5)収益(一・八点)と考えられている¹⁾。

では経営的見地に立てばどうか。とくに私学においては、個々の事業の採算性が気になるのは当然のことである。しかし、全国の大学・短大の学長あるいは理事長を対象とした「公開講座を実施するうえで日頃困難を感じていること」

という質問において、採算性を問題としたのは私立大学で二・一%。一五項目中の最下位であった。現行の生涯学習事業が高い収益を上げているのであれば理解できるが、現実はそのような結果が出るといふことは、公開講座を収益事業とはみなしていないということになる²⁾。

瀬沼克彰氏の指摘によると、大学公開講座の運営は「片手間仕事型」を脱しきれていないところが多いという。専任職員を配置して、本気で収益を上げようという体制をとりにくいのである。それはもともと収益を期待されていない存在であるからなのか、それとも片手間仕事型でやっているから収益が上がらないのか。

一方、出版部は規模の大小はあるにせよ、専任職員を置いた活動をしている。瀬沼氏のステージ分類でいけば、③から④が出版部の位置といえよう。

生涯学習テキストの出版

私ども玉川大学にも「継続学習センター」という名前の生涯学習施設がある。開講して八年目を迎え講座数も三〇〇を超えているが、いまのところこの大学公開講座のテキストを出版部で刊行した実績はない。公開講座の一講座当たりの受講者数は数十名規模が大半なので、これだけでは出版物としての基礎部数と考えるのは難しい。ただ、なかには二〇〇〜三〇〇名の講座もある。阿部賢典氏によれば、「教材の採用は担当講師に一任」ということだから、受講者数がある程度みこめる講座であれば、公開講座のテキスト開発も出版部の範疇に入ってくるかもしれない。

出版セクションをもつカルチャーセンターの主催者は教材販売もセットにして収益を上げているという事実もあるので、今後はもっと収益事業部門同士のタイアップが考えられてもよいだろう。

大学における生涯学習を「社会への開放策」と捉えると、その形態は、公開講座に限らない。たとえば、放送大学などの遠隔教育、夜間大学院、通信教育、社会人入学なども当てはまる。ここまで概念を広げると、放送大学や通信教育で使用する「教科書」とのかかわりで、大学出版部との接点が出てくる。

放送大学のテキストは、大学出版部協会加盟校である放送大学教育振興会が、一〇〇％編集・製作を請け負っている。年間約三二〇講座、受講者数約九万人というかなりの

規模なので、安定した出版活動が成り立っている。

また、慶應義塾、法政、玉川、明星、中央、産能など通信教育部門と出版部をあわせもつ大学はいくつかあるのだが、通信教育テキストの編集・製作に出版部が直接かかわっているところは少ない。玉川を除いては、通信教育テキストの製作に特化した専門部署をもっている。

玉川大学でもかつては通信教育テキストを製作する専門部署が学内にあったが、最近では新規採用されるものの製作はすべて出版部で請け負っている。年により刊行点数は異なるが、カリキュラム改訂があった二〇〇〇年度の実績は市販もする単行本として二点、通信教育で使用するのみの受託刊行物が一〇点であった。年間約一〇〇〇部採用される科目のテキストであれば、それを基礎部数にできるので、多くの部数をみこめる。

市販もする単行本にするか、通信教育テキストに特化するかの判断は、その科目が学部や他大学でも採用される可能性があるかどうかで分かれる。

出版部がめざしていくものとは？

利益が上がっているかどうかは別に、年間数十点の新刊を刊行し、何億という売上規模の大学出版部であれば、本を通してかなりの人にその大学の名前を知らしめることができる。広報効果はもともと計測化しづらいものだが、公開講座と同様、出版部も大学を広報するという点では効

果がありそうである。よくトヨタ一社の売上よりも少なく、ダイエーの負債額と同じであるとしたとえられる、出版界の総売上は二兆三二五〇億円だが、糸井重里氏によれば「出版界が果たしているイメーჯ効果は二〇兆円」とのこと。実際の数字以上に、出版が社会に与えているインパクトの強さを示すひとつの例である。

大学出版部の使命としては、「学術専門書・大学教科書・啓蒙書」の刊行が三本柱であると言われ続けてきたが、現状は「学術専門書」をメインとしているところが多い。

大学出版部の存在意義については、先輩諸氏によりさまざまなことが語り継がれてきているので、改めて触れないが、ひとことでは「大学にとってのステータス」だろうか。公開講座と同様、「収益事業部門」なのだから、収益が上がりさえすればよい」とだけ考えている人はそうはいまい。大学出版は文化事業であり、出版部を自前でもち、地道に出版活動をしている大学は、文化人からみれば、それだけでイメーჯアップの対象だろう。しかし、それだけでいいということにもならない。母体大学は、出版部や公開講座で大儲けをしようとは考えてはいないだろうが、大損をしてもいいとも考えていないのである。

意義のある「学術専門書」を刊行することでステータスを誇る一方で、「大学教科書」という最も確実に収益が計算でき、最もわかりやすい大学との関係にも力を入れ、「啓蒙書」で社会へPRする。なおかつ収益も上げる。「大

学と社会を結ぶ知のネットワーク」を標榜する大学出版部には、それらのバランスを保っていくことが、今後ますます求められるだろう。

大学そのものが定員割れなど深刻な問題に直面し、出版界全体でも売上が下降線をたどっている。この二重苦に挟まれた大学出版部には、さまざまな点で発想の転換が求められているのかもしれない。

大学にとっての新たな収益源としては、二〇〇四年四月にスタートする「日本版ロースクール」法科大学院制度、また二七機関が取り組んでいる承認・認定TLO（技術移転機関）などが出てきている。出版部も、通信教育や公開講座はもちろん、これらの新しい事業との連携をも真剣に考えていくことが今後の課題となるだろう。

■注

- (1) 山田達雄「大学開放のための経営管理モデル」山田達雄編著『生涯学習の知識ネットワーク』学校法人経理研究会、一九九三年、三六〇三七頁。文中で利用した点数は、担当者が「現在」重要と考える度合いを五段階で評価したのから平均点を算出したもの。
- (2) 田中雅文「講座公開事業の問題点」山田達雄編著、同前書、四七〇五七頁。

騙しのテクニク

青木淳一

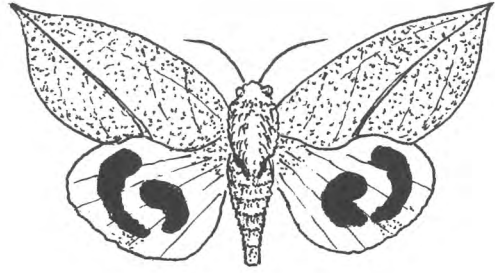
亜熱帯や熱帯の森を歩いていると、生物が生き延びるために、さまざまな騙しの技をもっているのに感心させられる。もっとも多いのは「隠れ」の技である。枯れ葉にそっくりなコノハチョウは有名であるが、カレハカマキリも地面に落ちている落ち葉と区別がつかない。ナナフシムシの一種でイネ科の植物の枯れた茎にそっくりなのがいて、しかもそれが腐りかけてカビが生えているところまで細工をしてあるのには、驚いた。

ムシクソハムシなんてケムシの糞にそっくりで、笑ってしまう。ほとんどがこれらの捕食者である鳥に対する対策であって、人間よりも目のいい鳥を騙すためだから、それはもう凝りに凝るわけである。

シャクトリムシ（シャクガの幼虫）は後ろのほうの足で木の幹に付着し、体の前のほうをピンと斜めに伸ばしていると、その形と色が小枝にそっくりである。山で仕事をする人たちが昼食時にこれを枝と間違えて土瓶をひっかけると、土瓶が落ちて割れてしまう。そこで、この幼虫のことを「どびんわり」というのだそう。

隠れるのではなく、逆に目立つ「脅し」の技もある。アケビコノハという蛾のなかまが、枯れ葉にそっくりな前翅をずらすと、突然後翅の表面に描かれた大きな目玉模様が現れる。大型のフクロチョウの後翅の裏面は灰色で、そこに大きい目玉模様があるので、一見して梟に見え、小鳥は逃げ出すのだろう。ボルネオの原生林の大木の幹に円形に密集していたキジラミに私が近づくと、かれらは一斉に放射状に広がって塊を広げる。小さい円が急に大きい円になるので、見るものはびっくりする。広がっても密度は均等である。キジラミ同士でどういう打ち合わせがしているのか、まったく不思議である。

脅しの中でも、ずるいのは危険な種に似せる技で、擬態と呼ばれている。毒針をもつ蜂にそっくりな黒と黄色の縞模様をもつハナアブがいる。アブの中にはウ



後翅に目立つ眼状紋をもつアケビコノハ

シアブのように刺すやつもいるが、ハナアブは菜の花などの花の蜜を吸うだけで刺さないのに、怖がられる。トラカミキリは見事にスズメバチに化けている。クナシの花によく飛んでくるスカシバという蛾も翅が透明で蜂にそっくりである。ドクチョウのなかまは苦いらしく、鳥が敬遠して食べない。その翅は独特の細かい白黒のまだら模様になっている。これに目をつけて真似する無毒の蝶がたくさんいることも知られている。

これらはみんな外敵から逃れるための技であるが、餌を掴まえるために隠れる場合もある。さきほどのカレハカマキリなどは、鳥の目を騙す意味もあるが、カマキリと気がつかずに近寄ってきた虫を一瞬のうちに捕獲するためでもある。中国の雲南省の森で見たことであるが、幹の表面に付着していたゴミ（と思われるもの）が、急に動きだした。そのゴミを捕らえてアルコール瓶に入れて振ると、ゴミが取れて中から肉食性のサシガメが現れた。このカメムシは自分をゴミに見せかけて近づいてくる虫に飛びついて捕食するのであろう。

このような騙しの技は、寒い地方や乾燥した土地ではほとんど見られない。そこに住む生き物たちにとっては温度、水、栄養源など厳しい環境問題が最重要課題であって、他の生物のことは二の次になる。ところが、気候温暖で水分も餌も豊富な熱帯林では、生活の最大の心配は外敵である。それからいかに逃れるか、さまざまな工夫が発達したのであろう。

人間も食うや食わずの厳しい時代には、お互い仲良くやっている。しかし、今の日本のように衣食足りてくると、騙しのテクニクが横行してくるようになると思われる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

川越 「小江戸」 散策



◀蔵造りの街並

川越は「小江戸」ともよばれ、江戸時代の文化を色濃く残している場所である。当時の建物や資料などがまちのあちこちにあるので、ここを訪れることで江戸の風情や文化を感じ学ぶことができる。東京池袋から電車で三〇分ほどのところに位置し、さつまいもの産地としても有名である。

川越は、一四五七年、上杉持朝の命により家臣の太田道真・道灌親子が川越城を築いたことで城下町が形成され、まちの中心が現在の場所となった。その後、徳川家康が江戸に幕府を開く際、江戸の北を護る重要な場所として、また農産物を主とした物資の供給地として川越藩に有力な大名を配置した。そのため、商業地としても繁栄する。一方、江戸からは日用雑貨、食料品などのさまざまな文化が伝わり、江戸の風情を強く残す「小江戸」とよばれるまでの発展を遂げた。交通は、陸路は川越街道、水路は新河岸川を利用した舟運による水上交通が整備された。特に舟運は、年貢米や食料品、日用雑貨、肥料などの物資はもちろんのこと、人の往来にも使用され川越と江戸を結ぶ大きな役割を果たした。

川越の歴史の紹介には火事の話が欠かせない。まず一六三八年には城下のほとんどを焼失する大火が起こった。現在のまちの原型は時の川越城主松平伊豆守信綱によって形成されたものである。その際、信綱は城を守りやすく攻めにくい城下町とするため、今日にも残る「袋小路」、「七曲り」、「鍵の手」などでまち割に工夫を施したのである。また一八九三年には、まちの三分の一を焼く川越の大火が発生した。復興にあたった当時の商人は焼け野原に残った土蔵をみて、蔵造りの技法が優れた防火建築であると分かり、以後広く採用したのである。

駅前の近代的な通りを少し歩くと、蔵造りの街並みにかわっていく。川越の蔵造りは、大きな鬼瓦、箱棟、重厚な観音扉が特徴とされる。この街並みの中に蔵造り資料館がある。建物は、当時の煙草の卸商が建てた蔵造り商家で、実際に蔵造りの中に入り建物を見学できる。館内にはこの街並みができるきっかけとなっ

大学出版部ニュース

▼東京国際ブックフェア二〇〇二

四月一八日から四日間、東京・有明の東京ビッグサイトで「東京国際ブックフェア二〇〇二」が開催された。同フェアは国内四六九社、海外七二社の合計五四一社の出展社に、会場も約一六〇〇坪という過去最大規模で行われ、前年度一・八%増の四万九五〇一人の入場者で賑わった。

今回は「子どもの読書推進」をテーマ



大学出版部協会の展示ブース

とし、「子ども読書の日」(四月二三日)の制定記念ブースを中心に、子どもの読書推進を行っている各団体の活動が紹介されたり、親子の来場者向けのイベント等が行われた。

書店向け商談会には約二〇〇社の出版社が参加し、活発な取引がみられた。また、版權ビジネスも行われた。

一方、割引販売は一般読者に定着した様相をみせ、多くのブースでブックフェア限定の謝恩価格で即売が行われた。大学出版部協会ブースでは、全二六校で約一六〇〇冊が謝恩価格で出品され、四八〇冊(昨年は四五一冊)の過去最高の売上実績をあげた。

▼春の総会

大学出版部協会の二〇〇二年度通常総会および部会・懇親会が、四月二五日に東海大学校友会館にて開催された。

総会には、東京学芸大学出版会がオブザーバーとして参加した。懇親会は、石井和夫元幹事長をはじめとする顧問の方々、オブザーバーまで七八名の参加者で賑わ

った(当番校・早稲田大学出版部)。

▼第二三回日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成一四年四月～平成一五年三月

『子どもたちの想像力を育む―アート教育の思想と実践』

佐藤学(東京大学大学院教育学研究科教授)・今井康雄(東京大学大学院教育学研究科助教授)編 東京大学出版会

『水の環境史―南カリフォルニアの二〇世紀』

小塩和人(日本女子大学文学部助教授)著 玉川大学出版部

『アメリカの福祉国家政策―福祉切捨て政策と高齢社会日本への教訓』

新井光吉(九州大学大学院経済学研究院教授)著 九州大学出版会

※日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

北海道大学図書刊行会

▼北海道大学125年史編集室編『写真集 北大125年』(A4判・五〇〇〇円) 建物とキャンパスの変遷に焦点をあて、時代の流れを読み解く。▼三木聰著『明清福建農村社会の研究』(A5判・一〇〇〇〇円) 抗阻に見られる「図類」を発掘検討。新たな明清史研究を展望する意欲作。▼鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』(A5判・一〇〇〇〇円) 実践的裏付けによる文書館論、評価選別論、史料整理論を提示。▼良村貞子著『アメリカにおける医療過誤と看護婦の責任』(A5判・六〇〇〇円) 日本の医療・看護に影響を与えてきた米国における制度の歴史的展開と医療過誤判例を詳細に検討。▼西山克典著『ロシア革命と東方辺境地域』(A5判・七二〇〇円) 「地域」(＝辺境植民地)の側から再構成した新たなロシア革命像。▼煎本孝編著『東北アジア諸民族の文化動態』(A5判・九五〇〇円) 政治的・経済的な影響を言語と文化の両面から解明。▼松浦誠著『スズメバチを食べる』(四六判・二六〇〇円) スズメバチ類を食材の視点から纏めた民俗学的・社会学的色彩の一冊。

聖学院大学出版会

▼金子晴勇著『エラスムスとルター——一六世紀宗教改革の二つの道』(五八〇〇円) 一六世紀のヨーロッパにおける宗教改革は、ルネサンスの影響を受けたキリスト教ヒューマニズムによる改革の流れとアルプス以北の、神中心の改革の流れの二つの道があった。前者を代表するエラスムスと後者を代表するルターは、ともに宗教改革運動を推進したが、ある時点から、相互に批判し、それぞれの歩みをするようになった。本書では、両者の思想的対立点と問いの立て方の違いに注目し、ヨーロッパ思想史における宗教改革思想の意義を論ずる。とくに、両者の対立点を「自律と神律」と捉え、近代的主体性を生み出した自由意志の観念とルターの奴隸意志論の中にある根源的対立を明らかにし、現代思想の問題である「人間の自由の問題」にまでいたる思想的水脈を掘り起こしている。本書は、聖学院大学が学術研究の成果を公開する意味で設けた「学術研究叢書」の三冊目にあたる。

麗澤大学出版会

▼アマルティア・セン著／徳永・松本・青山訳『経済学の再生——道徳哲学への回帰』(三〇〇〇円) いま、グローバル市場化が叫ばれ、電子マネーが飛び交っている。だが、人間の日々の営み・生きるリズムの本質は、かのアダム・スミス(『国富論』)の時代といささかの変わりもないはずだ。ところが、現代の経済現象を解析すべく、経済学は高度に数学化し、専門家すら理解が困難になっていくという。こうした「現代経済学」のあり方(有効性)そのものに警鐘を鳴らし続けているのが、アジアで最初のノーベル経済学賞受賞者、セン教授(ケンブリッジ大学)である。本書には、小著ながら、センの経済学に対する基本的な立場が明確に語られており、彼の真摯かつ鋭利な思想のエッセンスを理解するのに格好の書である。



『経済学の再生』
本体2300円(税別)

慶應義塾大学出版会

- ▼井筒俊彦訳・著『Lao-tzu: The Way and Its Virtue』(二五〇〇円) 東洋の思想を欧米の言語によって紹介する、井筒ライブラリー・東洋哲学シリーズの第一冊。本シリーズは世界的碩学、故井筒俊彦の業績を継承すべく発刊した。本巻は井筒自身による老子「道德経」の英訳。漢文原典対照、論考「Lao-tzu and Chuang-tzu」も収録。東洋哲学の最高權威、ハーバード大学杜維明教授も絶賛。
- ▼オスカー・ハレツキ著・鶴島博和他訳『ヨーロッパの時間と空間』(二〇〇〇円) 東欧からの視点によるヨーロッパ通史の邦訳。著者は、共產主義体制崩壊後、その歴史観が再評価されており、本書は、ヨーロッパが新時代を迎えた現在、新たな意義をもつ名著である。
- ▼小野直樹著『戦後日米関係の国際政治経済分析』(五四〇〇円)五〇年間という長期にわたり維持されてきた戦後日米関係の全体像について、日本を取り巻く国際的な環境と日米両国の国内の構造的要因から包括的・実証的に分析した、気鋭の著者による画期的論考。同時多発テロ事件後の日米関係についての論考も収録。

産能大学出版部

- 中村元一・多久安英著『デジタル時代のインフラプロバイダー』(一八〇〇円) 勇猛果敢に経営革新に挑戦し、成功を収めた芝浦メカトロニクス株式会社の戦略経営を、戦略経営研究の第一人者である二人の著者が徹底的に分析・解明する。産能大学出版部編『現代ビジネスハンドブック』(一五〇〇円) 工作上判断ができない場面であつたら、現代ビジネスハンドブックを開いて知識を確認して実践すれば、自信を持ってイキイキとしたビジネスライフをおくることができるでしょう。
- 会社語研究会編『現代会社語ハンドブック』(一五〇〇円)「会社語」とは、会社で習慣的に使われている仕事を進める上で欠かせない言葉であり、日常の打ち合わせや会議・雑談の中で終始出てくる言葉のことである。会社語の常識的な基本概念が捉えられる用語集。
- 田中雅康著『利益戦略とVE』(一五〇〇円) 原価企画に対する初心者や、若干の知識のある人、VEについて基本知識のある人、原価企画の導入を検討している経営者・管理者を年頭にまとめた書。

専修大学出版局

- ▼田邊信太郎・島蘭進編『つながりの癒し—セラピー文化の展開—』(二四〇〇円)「心のケア」が拡充していく現在を見据えながら、心理療法やセルフヘルプ、若者論、代替医療などを題材に、新たなつながりの文化を探究する。
- ▼水川侑『日本のビール産業—発展と産業組織論—』(二四〇〇円) 容器、味、値段など製品の差別化戦略を中心とした企業間のシェア争奪戦や、量販店の出現と発泡酒、地ビールの登場に焦点をあて業界の進むべき道を提言する。
- ▼林正(イム・ジョン)『村上春樹論—コミュニケーションの物語—』(二四〇〇円) 韓国の新鋭研究者による新しい角度からの村上文学論。多重的な自己と世界、その間を往き来する人物たちを分析し、村上春樹の全貌を照らし出す。
- ▼常行敏夫・岡山陽子他編『The Global Economy in the News—英字新聞で読む国際経済の動き—』(CD付・二四〇〇円) 時事英語を読むためのテキスト。内容は最新記事をジャパントイムズから厳選。記事を読むための知識や背景を解説。

玉川大学出版部

玉川大学では、二〇〇二年度より文学部教育学科と芸術学学科を「教育学部」「芸術学部」として独立・発展させるとともに、英米文学科と外国語学科を改組して、文学部に「人間学科」「国際言語文化学科」の二学科を開設。これで農・工・経営とあわせ、六学部になりました。

二〇〇二年上半年期の刊行物より

《大学教科書》

▼三井善止編著『新説 教育の原理』(一五〇〇円)

▼芦澤成光・所伸之編『国際経済と経営』(二八〇〇円)

▼菊池重雄・佐藤成男編『国際社会と文化』(二八〇〇円)

《教育専門書》

▼ウィルソン監修／押谷由夫・伴恒信編訳『世界の道徳教育』(二八〇〇円)

▼島田博司『私語への教育指導—大学授業の生誕誌2』(二八〇〇円)

▼島田博司『メール私語の登場—大学授業の生誕誌3』(二四〇〇円)

▼日本高等教育学会編『大学の組織・経営再考—高等教育研究第5集』(二八〇〇円)

中央大学出版部

▼城山英明・細野助博編著『続 中央省庁の政策形成過程—その持続と変容—』(二八〇〇円) スタンダード・テキストの地位を得た『中央省庁の政策形成過程』(中央大学出版部、一九九九年)の続編。省庁内部の意思決定プロセスを明示化。政治学、行政学、経済学など多面的な分析をもとに論じ、財政・会計、人事制度についても、これまでの制度を総括するとともに今後の課題までも検討。

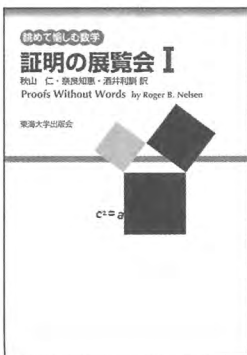
▼中央大学法職講座運営委員会編『法律家をめざす諸君へ—二〇〇二年度版—』(二〇〇〇円) 司法試験の難関をどのように突破するのか!そのノウハウを練達教授・法曹界の先輩が語り、合格者体験記、司法修習生の体験談、裁判官・検察官・弁護士の仕事の現状をも紹介。

▼井上英治著『現代不法行為論—判例と理論—』(二五〇〇円) 現実の不法行為事例は多様であり、特に一九五〇年以降の複雑化はめざましい。本書は不法行為における判例法が何であるか、その判例法の理論的基礎づけは何であるかについて紹介を試みると同時に、不法行為理論の現状把握と理論的体系化を展望する。

東海大学出版会

▼R・B・ニールセン著／秋山仁・奈良知恵・酒井利訓訳『証明の展覧会I—眺めて愉しむ数学』(二二〇〇円)

本書は、数学の公式や定理の証明を、小難しい数学表現や長い数式に頼らずに、やさしい図によって表現しています。読者の皆さんは名画を鑑賞するような気持ちで、気軽に図を眺めて、試行錯誤しながら証明を考えてみてください。アッと驚くような発見があるかもしれません。数字と図の対応によって、数の世界の本質に気づくと同時に、知らず知らずのうちに数学に親しみを感じるはず。中高生はもちろん、教員にも教授法の一助として役立つことを願っています。続編として『証明の展覧会II』(十月刊行予定)も出版準備中です。



東京大学出版会

▼「中・上級日本語教科書 日本への招待」(東京大学AIKOM日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌)

文科省は、日本の大学・大学院で学ぶ留学生を二〇万人(〇一年総数、七万八八二人)に受け入れる政策をとっており、これにともない、大学の教育プログラムや教材の充実がますます求められている。この教科書は、東大駒場の短期交換留学生の日本語学習授業をもとに生まれた。その内容は、さまざまな視点から日本社会についての情報を集めたものとなっている。本教科書の目的は、「日本語を学ぶ」ではなく、「日本語で学ぶ」点にある。語彙や文型、表現など教育的配慮が十分であるのはもちろん、それだけでなく学習者が日本に関する情報を活用しながら、日本語で自分の国、社会、文化について情報を発信・交換することまでをめざしている。

「テキスト」(二四〇〇円)、「予習シート・語彙・文型」(二六〇〇円)、「CD 3枚付セット」(九五〇〇円)につき、「教師用指導書」(三八〇〇円)も刊行。

東京電機大学出版局

▼シリーズインターネットの知的情報技術『情報検索とエージェント』北村泰彦他著/A5判一四四頁/一八〇〇円)

インターネットから必要な情報を随時適切に取り出すことができれば便利であるが、そのための道具は決して使いやしいものではない。たとえばサーチエンジンを利用した場合、必要とする情報を一回の検索で入手することは非常に難しい。たいてい、情報の絞り込みや検索キーワードの再設定が必要となる。

本書では、AIをはじめとする知的情報技術を活用して、インターネットから必要かつ有効な情報をより簡単に取り出すための技術やその研究について、豊富な応用例をもとに解説した。インターネットのもつ可能性を十二分に感じ取ることでできる一冊である。

本シリーズ(三巻)では、知的情報技術を用いたインターネット関連技術の概要および研究について、情報技術を学ぶ学生や研究者・技術者に向けて解説する。

▼続刊『Eビジネスの情報技術(仮題)』(九月刊行予定)『社会システムとネットワーク(仮題)』(七月刊行予定)

東京農業大学出版会

〈カラー写真集一〇〇シリーズ〉

▼せたがや一〇〇の素顔—もうひとつのガイドブック— せたがや一〇〇の素顔編集委員会編 葦茂寿太郎責任編集 東京都世田谷区の自然、文化、産業、生活など、みどころ一〇〇を写真と解説付きで紹介。世田谷の意外な見どころに出会う。平成一四年三月刊/B六判/一三二頁/一六〇〇円

〈カラー写真集一〇〇シリーズ〉

▼あつぎ一〇〇の素顔—もうひとつのガイドブック— あつぎ一〇〇の素顔編集委員会編 天野卓責任編集 神奈川県厚木市の自然、文化、産業、四季と生活など、みどころを写真と解説付きで紹介。ちよっぴりアカデミックな知識が得られるガイドとなっている。平成一四年三月刊/B六判/一四三頁/一六〇〇円

▼ソマリア語辞典〈日ソ英一英ソ日〉東京農大沙漠に緑を育てる会編 ソマリアの人々にそこの生活のために生産技術を伝えるメンバー奮闘による成果。日常会話集もあり実用的。平成一四年三月刊/B六判/四〇〇頁/三六〇〇円

法政大学出版局

▼H・P・デュルによる『文明化の過程の神話』シリーズの第IV巻『挑発する肉体』（藤代幸一・津山拓也訳）が発売されました。本巻では乳房に焦点を絞って、その挑発する力と、それが生み出す（へはじらい）の歴史を、宮廷社会から自然民族の世界、性風俗産業や女性用下着の広告までを渉獵してあとづけ、「人類は本当に文明化したのか」と問いかけます。七百頁におよぶ大冊ですが、二百点を超える写真・図版を配した本文は読みやすく、風俗史としても興味つきない一冊です。ぜひ一読下さい。



四六判上製
定価（本体6600円＋税）

『文明化の過程の神話』シリーズ／既刊
『裸体とはじらいの文化史』四三〇〇円
『秘めごとの文化史』……五八〇〇円
『性と暴力の文化史』……六六〇〇円

放送大学教育振興会

『老年期の心理と病理』（竹中星郎・星薫著）：高齢化社会を迎えた今日、人生の終盤期にあたる八〇〜九〇歳代をどのように生きるかは、人類にとって最も新しい研究テーマとなったが、老人問題の多くは、介護システムや医療福祉など、高齢者以外の世代にとっての問題に集中している。本書では、高齢者が厳しい状況をいかに生きているかを考察し、彼らの思索や悩み、不安、孤独、妄想を理解するとともに、うつ病や神経症、痴呆症などの病の背景を考察し、高齢者における諸問題を多角的に検討している。

『情報化社会研究—情報革命と社会の変革』（柏倉康夫編著）：産業革命の鍵はモーターであり、社会を動かしたのはエネルギーであった。今日それらは「コンピュータ」と「情報」へと移行しつつある。情報の伝達手段の発展は、人類社会を質的に異なるものへと導き、人々の生活に大きな影響を与えつつある。映像、イメージ、ラジオ、写真、デジタル革命、パーソナル・コンピュータの誕生など、二〇世紀の情報革命が文化・社会に与えた影響を文化生態学の立場で研究。

明星大学出版部

新刊

- ▼森下 恭光／佐々井 利夫共著『増補道徳教育の研究 改訂』（一八〇〇円）
 - ▼菱山 覚一郎著『社会科の理論と課題』（一五〇〇円）
 - ▼鯨井 俊彦編著『特別活動の展開』（一五〇〇円）
 - ▼明星大学教育実習研究会編『教育実習—幼稚園—』（一五〇〇円）
 - ▼明星大学教育実習研究会編『教育実習—小学校—』（一七〇〇円）
 - ▼明星大学教育実習研究会編『教育実習—中学校・高等学校—』（二七〇〇円）
 - ▼横倉 三郎／小鍛冶 徳雄／山口 俊久／飯島 信明／藤井 文夫著『電気工学実験 I 平成14年度版』（九八〇円）
 - ▼佐藤 弘之／薮野 光平／高原 英明／新井 啓次／大矢 博史著『改訂電気工学実験 II』（一〇〇〇円）
 - ▼秋山 久著『マスコミ論』（一〇〇〇円）
- 大学出版部としての特徴ではあるが、テキストのみの刊行が続いている。

早稲田大学出版部

▼『工作機械産業の職場史 1889-1945 「職人わざ」に挑んだ技術者たち』(山下充、四八〇〇円) 日本の工作機械はどのような職場で作られてきたか。職人と技術者の日常をインタビュ取材で描き、ものつくりの原点を問う。

▼『イメージの心理学—心の動きと脳の働き』(J・リチャードソン、西本武彦監訳、三三〇〇円) 認知心理学と脳科学の最新成果を取り入れて、イメージ誕生のメカニズムを解説する。

▼『イギリス・ルネサンス演劇集Ⅰ・Ⅱ』(大井邦雄監修、Ⅰ五六一〇〇円、Ⅱ六四〇〇円) シェイクスピア最後の作品「二人の貴公子」(フレッチャーとの共作)、ブルーム「アンティポデイス」他を収録する。「日本のシェイクスピア研究を一歩進めた」(朝日新聞評)。



名古屋大学出版会

▼井上 進著『中国出版文化史—書物世界と知の風景—』(四八〇〇円) 書籍の成立から印刷本誕生をへて一般化するまでの二千年にわたる書物の文化史。出版の諸相に光をあてるとともに、知や社会との関係に注目し全体像を描く。

▼和田一夫/由井常彦著『豊田喜一郎伝』(二八〇〇円) 若き技術者として出発し、日本の自動車事業創出に取り組んだ豊田喜一郎—本書は、トヨタ自動車創業者の実像を、綿密な資料調査に基づき描き出した伝記の決定版である。

▼広木詔三編『里山の生態学—その成り立ちと保全のあり方—』(三八〇〇円) 人間活動との密接な関係の中で形成され、近年急速に失われつつある里山。本書は東海地方を事例に、地史的考察や植生の研究、トンボ・ギフチョウの調査を通じて里山の全体像に迫り、その保全策を提言。

▼渡邊一功他監修 堀部敬三他編『小児科診療マニュアル』(七五〇〇円) 第一線の現場ですぐ役立つように編集された「診断と治療」のハンドブック。小児科の実地医家が診療する代表的な疾患について最新の治療法を具体的に詳述。

京都大学学術出版会

▼『生態学ライブラリー』第二期(四六判上製・各巻二三〇〇円) 配本開始。シリーズ『生態学ライブラリー』全24巻は第一期を終了し、あらためて第二期がこの5月にスタートした。巻数順に、13巻の生涯、ヒトの生涯、14巻の生活誌、15巻のイワヒバリのすむ山、16巻のハレのチンパンジー、17巻の進化する病原体、18巻は碧か、19巻の植物のかたち、20巻のねずみの生態学、21巻のサルとつきあうには、22巻源としての魚たち、23巻の生活史、24巻ハンミョウの四季、の12巻。最前線の研究を著者自身の学問人生とともに語り、生きものの面白さを伝える現代の博物誌。

▼第1回配本・第19巻『植物のかたち—その適応的意義を探る—』酒井聡樹著/植物たちの多様性の謎に挑む。



大阪経済法科大学出版部

- ▼『現代アジア最新事情―21世紀アジア・太平洋諸国と日本―』吉田康彦編著／二六〇〇円／同時多発テロ事件以降の二一世紀のアジア・太平洋諸国を読み解く。ジャーナリスト出身の研究者を中心とした執筆陣が平易でわかりやすく解説。
- ▼『アジア研究所研究叢書 10 元暹佛学思想研究』金 勲 著／三五〇〇円／新羅仏教の最高レベルを誇った元暹の仏教思想を和諍思想を中心に多側面から分析。元暹の生涯・著述、独自性と実践観を解明し、東アジア仏教史への影響を把握する。
- ▼『朝鮮のジャンヌダルク 論介(ノンゲ)』鄭棟柱著／吳満編著／三六〇〇円／「文祿の役」当時、加藤清正隊先鋒長の毛谷村六助を抱き、投身自殺した論介の殉死の意義を解明。「妓生」とされてきた通説を批判し、妓生に偽装して敵將を殺すという積極的な死を解明し、真の論介像を打ち出す。
- ▼『2000年前の東アジア―弥生文化の再検討―』村川行弘監修／二六〇〇円／国際学術シンポジウムでのアジア各国からの報告を編集。

大阪大学出版会

- ▼松岡 博『国際家族法の理論』国際結婚、外国生活などにより家族の紛争も国際化してきた。どこの国の法律が適用されるか、どの国で裁判が開かれるかなど、解決への方向を探る。A5判・二四四頁・三五〇〇円。また、その参考書・実習書ともいえる『国際私法・国際取引法判例研究』もほぼ同時に刊行。裁判例二四例を冒頭に掲げ、事実の概要、判旨、評釈を完備している。A5判・二四〇頁・一八〇〇円。
- ▼内田充美『Causal Relations and Clause Linkage; Consequential Par-ticiple Clauses and Their Use』邦題『分詞構文の認知機能言語学的研究―因果関係と接続構造―』英語とフランス語の現在分詞構文の分詞節がもつ機能に関する新知見。菊判・二六八頁・六〇〇〇円。
- ▼『大阪大学新世紀セミナー』として次の二冊を刊行。いずれも、A5判・九六頁・一〇〇〇円。村川英一『熟練技能の継承と科学技術』美しい船体に込められた匠の「わざ」とその継承を語る。前田芳信編『情報化時代の歯科医療』コンピュータ使用の口腔外科、矯正、補綴。

関西大学出版部

- ▼鶴飼康東著『市場と正義―経済理論と日本社会の葛藤』(二四〇〇円) 日露戦争から小泉純一郎内閣まで日本の百年の歴史を現代経済学の基本モデルを用いて縦横に分析する。欧米から輸入された経済学の宿命と日本社会の葛藤を論じつつ、市場機構による社会改革という提案に至る衝撃的論証過程。政策研究の新風。
- ▼比留間太白著『よい説明とは何か』(二五〇〇円) 認知主義の説明研究の特徴と難点を確認し、認知主義の批判者として登場した社会的構成主義の説明研究が、説明の現実をどのようにとらえているのかを明らかにする。そして説明の現実を改革し、「よい」説明とするにはどのような可能性があるのかを提案する。
- ▼静哲人・竹内理・吉澤清美共編著『外国語教育リサーチとテストイングの基礎概念』(二二〇〇円) テストとリサーチに特化した日本人研究者、大学院生向けの本格的著作。「三つの導的論考」「三八二項目を網羅した用語集」「リサーチメソッドやテストイングに関する文献紹介と外国語教育学関係のジャーナル紹介」の三部で構成される。教師必携の書。

九州大学出版会

▼「文学部の学部共通教育に関する研究・開発プロジェクト」の成果。①池田絃一・今西祐一郎編『文字をよむ』（A5判・三〇四頁・二八〇〇円）すべての「知」は「よむ」ことから始まる。漢字を「よみ」、仮名を「よむ」とはどういうことか。ハンゲル、満洲文字、タム文字等々はどうのように「よむ」のか、どのような文化ではぐくまれた文字なのか。さらに、「よむ」は文字だけではない。図も「よむ」ものである。②池田絃一・眞方忠道編『ファンタジーの世界』（A5判・三四〇頁・二八〇〇円）ファンタジーには心をいやすばかりではなく共同幻想を形づくる働きもあるのではないか。こうしたファンタジーの諸相に、文学部の各専門分野から切り込んでみた。いわば実験室の学内、外への公開である。

▼小川功著『企業破綻と金融破綻―負の連鎖とリスク増幅のメカニズム―』（A5判・五六六頁・七〇〇〇円）連鎖と煽動者を摘出した恐慌期破綻事例研究。

▼清水靖久著『野生の信徒 木下尚江』（A5判・三九八頁・五二〇〇円）二十世紀初頭の民主主義と非戦論、その軌跡。

東北大学出版会

▼谷口尚司、八木順一郎著『材料工学のための移動現象論』（B5判、一二二頁、二〇〇〇円）本書は、工学部材料系の学部学生を対象とした教科書で、著者が過去数年に行った講義録をまとめたものである。一五週の講義に最適で、初学者を対象とした分かりやすい内容となっている。材料製造に関わる多くの例が引かれ、また内容の理解を助ける演習が豊富に含まれている。さらに、電磁力を利用した材料プロセシングの理解に必要な電磁気学の解説があるのも本書の特徴である。

▼高橋英博著『都市機能の高度化と地域対応』（A5判、一三〇頁、四五〇〇円）本書は、青森県八戸市を事例の対象として、日本の地方中小都市が自ら発展するための条件を見出そうとするものである。八戸市における工業構造の高度化と都市機能の発展の関係や同市が抱えてきた都市問題、地域問題が検討されると共に、地域特性や地域資源の果たす役割が「場所の個性」の観点から分析されている。地域問題の研究者だけでなく、地方の振興に携わる公務員や地域住民にとっても有益な本である。

流通経済大学出版会

▼（近刊）栗田房穂著『成熟消費社会』の構想―消費者はどこに向かうか』（予価二〇〇〇円）

私たちは、消費が国民経済の大きな比重を占める社会で生活しながら、消費に関わる諸問題に真つ正面に取り組んでこなかったように思う。それはおそらく、消費と云い消費社会と云い、あまりにもとりとめない対象であるからであろう。

本書は、この消費社会と言う巨象への挑戦である。まず、二〇世紀後半から二一世紀初頭にかけての消費社会が成熟して行く過程を描写する。ついでこの間の消費社会の変化と消費者意識と消費行動の変化を捉え、それを分析検討することで成熟消費社会の消費者の実像を浮き彫りにしている。その上で、理想型としての成熟消費社会を鮮明にし、その道筋を構想するのである。

さらに本書は、消費社会の分析だけでなく「消費の成熟化」や「成熟消費社会」をキーワードに日本経済のパラダイムシフトを見据えた戦略をも提示している。

三重大学出版会

▼鈴木実平他著『機械工学科演習書』A4、上巻一五六頁、下巻一六〇頁、一五七五円。本書は、機械工学を専攻する一年生と二年生の学生を対象にした演習書である。高等学校と大学の教育のギャップを埋めるために、数学と力学に重点をおいて編集した。各科目については優れた演習書が多数出版されているが、その数が多すぎるために逆に学生は教科書の選択に迷ったり、勉強意欲を殺がれるといった現状がある。本書の例題とその解答は丸暗記しておくべきほど重要な機械工学の基礎である。「読書百遍義自ら見（あらわ）る」と言っ。本書では、一学期十五回の講義中に百回読み返しができるように内容を厳しく限定した。言うまでもなく、国際化とは外国語に熟達することではなく自らの専門分野において国際的に通用する実力を持つことであるが、専門分野の知識を外国語から吸収できる力や外国語で論文を発表する力を養成することも大切である。それには外国語の専門用語に慣れることが肝心である。著者らも、また期待される読者も日本人であるのだが、敢えて英語で執筆した。

関西学院大学出版会

▼山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』
(A5上製・六〇〇頁・一八〇〇〇円)

- 第一部 人類学と植民地の記述
- 第二部 統治政策と技法
- 第三部 植民地化とジェンダー
- 第四部 文化の創出と展示
- 第五部 ポスト・コロニアリズムの表象と葛藤

▼片寄俊秀著『商店街は学びのキャンパス』
(四六並製・二二四頁・二二〇〇円)

いま、日本でダメなのは大学と商店街。現場に学ぶ、まちづくり総合政策学への招待。まちかど研究室「ほんまちラボ」からの発信。

▼木野光司著『ロマン主義の自我・幻想・都市像』E・T・A・ホフマンの文学世界―
(関西学院大学研究叢書)
(A5上製・四〇七頁・一〇〇〇〇円)

▼紺田千登史著『フランス哲学と現実感覚―そのボン・サンスの系譜をたどる』
(関西学院大学研究叢書)

(A5上製・三四〇頁・七〇〇〇円)

ウェブサイト委員会ニュース <http://www.ajup-net.com/>



▼大学出版部協会のウェブサイトは、大学出版部協会の最新のニュースを伝えています。毎月、二十日あたりで更新しています。「新刊速報」「大学出版部ニュース」にご注目ください。▼このサイトは、大学出版部協会から選出された運営委員と各出版部から選ばれた連絡委員により内容が検討されています。ウェブサイトも開設されてから四年を経過し、ますます大学出版部協会の広報の機能を果たすとともに、さらにウェブサイトの可能性を追求する実験をさまざまに検討しています。▼ご意見・ご要望は mail@ajup-net.com宛にお願いします。

（書籍の表示価格は税別です）

■井上ひさし『東京セブンローズ』（上下、文春文庫）を読んだ。戦中戦後の社会状況と市井の人々のくらしを、団扇職人の日記という形をとって描いた力作長編である。暗く悲惨な時代が描かれているにもかかわらず、たとえば国粹主義者たちの支離滅裂な論理に、思わず笑わせられてしまうのは、作者ならではのテクニクといえよう。

■とはいえ、この本のねらいは別の所にある。すなわち、同じ作者の『ニホン語日記』（正統、文藝春秋）に連なる日本語論なのだ。そのために、小説としてもスラップスティックに過ぎるのだが、主人公と占領軍言語簡略化担当官ホール少佐の対話がこの作品の圧巻であることに間違いない。

■しかも、このホール少佐の日本語改革論は、妙に説得力があるのだ。もちろん、対抗する論理がいいかげんで主人公（すなわち作者）の主張も生きてこないから、これも作者の意図したところなのだろう。ホール少

佐は、並の日本人以上に日本語に通じた人物として描かれている。いずれにせよ僕は、読みながらホール少佐の発言に何度かうなずいていた。

■なぜなのだろう。僕はローマ字論者でもないし、漢字廃止論者でもない。作者ほどではないにしても、自国の言葉で文化を伝えていきたいと願っていることに変わりはない。にもかかわらずホール少佐の発言にうなずいてしまうのは、職業柄、正字と俗字の使い分けなどに悩まされているためかもしれない。あるいは、コンピュータとのやり取りで、漢字を扱うことやや



文字体系とデジタルデバイス

製作の現場から [28]

こしさにストレスを感じているためかもしれない。最近ではユニコードの登場とそれに対応したフォントの発売によって、第一、第二水準を超えるかなりの文字が打てるようになったものの、それを使えるかどうかはOSやインプット・メソッド、そしてアプリケーションや出力機に依存する。さらに、フォントベンダーによって、収録される文字数は異なっている。この順列組み合わせの複雑さは半端ではない。もちろん、現在は過渡期ではあるのだが…。

■しかし一方では、そのような愚痴を述べるのは贅沢なことなのかとも思う。三上喜貴『文字符号の歴史「アジア編」』（共立出版）を見ると、日本語などはむしろ、コンピュータになじみやすい文字体系なのかも知れないという気がしてくる。本書によれば、「英語を第一言語ないし第二言語とする人口は…世界人口の約一割に過ぎないが、インターネット利用者の六割は英語を母国語とする人口である」ということだが、それは経済力

の問題であると同時に、アジア諸言語の複雑な文字体系に起因するデジタルデバイス（情報アクセス格差）の存在をも示している。漢字やハングルの文化圏を除けば、アジアの多くの民族は、英語を用いない限り、まさしく「蚊帳の外」に置かれているのだ。いや、インターネット以前に、母国語でパソコンを利用できるのは、特権的存在であるときえいえるのである。

■『文字符号の歴史』は気楽に読み通せる本ではないが、第一章「アジアの多様な文字世界」、第二章「文字符号の歴史」、そして第六章「デジタルデバイスと文字符号」は、多少とも文字に関心のある人間であれば興味深く読める内容だ。アジアの多様な言語と文字体系の存在を知り、それをコンピュータ上で利用するためにどのような努力と工夫がなされているかを知ることとは、日本語の問題、JISコードや漢字制限の問題を考える上でも必要なことだと思う。人により、結論はさまざまであるにせよ…。（埼玉キヤンパルズ）

デジタル的な本のあり方とは



■「出版社は情報を送り届けるビジネスなのか(ビットのビジネス)、それとも製造業なのか(アトムのビジネス)」。デジタル形式の書物は決して品切れにならない。いつでもそこにあるのだ。出版界の守旧派にすれば「電子出版好きの御託」であり、書籍愛好家にすれば「別世界の世迷い言」に聞こえるかもしれないが、デジタル出版の現状からすれば、冒頭の文章にとりたてて新規性はない。オンライン書店が一般に認知された今では、当たり前のことが書かれているにすぎない。

■しかし、一九九五年に『ピーピング・デジタル』という本の中で、この文章に出会ったときは、まるで未来社会の予言のように聞こえた。インターネットがブレイクした年とはいえ、デジタル革命(ＩＴ革命とは言わなかった)は夢であり、そこで語られる到達点は、ネットワーカー社会の理想郷にすぎなかった。そもそもピーピング・デジタルという言葉自体、著者のＭＩＴ教授 Ｎ・ネグロポンテによるア

ジテーションではないか。ＣＤ－ＲＯＭのようなパッケージ系電子出版でも成功例が少ない中で、一足飛びのネットビジネスは未来の話であった。

■「未来の予測についてはずれたことはないが、それがいつ起こるかは予測が当たった試しがない」そうである。ただ、コンテンツがネットワークに流れ出す速度については、一般の予測よりはるかに前倒しで実現している。リアル社会の七倍とも十倍とも言われるネットワーク上の時間軸で、ネグロポンテが描いた未来はすでに今日となったのである。彼は建築デザイナー

出身らしく、人とマルチメディアをつなぐインターフエースに注目に開発している。それだけに紙の利点を認めている。「書物はコントラストの高い表示装置である。軽くて簡単に目を通すことができ、それほど高価でもない」とも書いている。紙の本の「デジタル的なあり方」に可能性を見いだせば、自ずと現行のデジタル表示装置である液晶が不満になる。

■一般にディスプレイの進歩という、精細度に注目されるが、読みやすさではコントラストも重要な要素となる。そして軽くフレキシブルに折り曲げることができると、何よりもデジタルディスプレイの欠点は電源がないことである。電気がなくても表示を維持し、書き換えるときだけ電気を要する表示装置。早くからこの重要性に気づいていたネグロポンテは、インターネットブームのさなか、自らが率いるＭＩＴメディアラボで「電子ペーパー」の開発に取り組んできた。九七年にこの開発チー

ムが独立して設立した会社が、世界に先駆けて商品化に成功したＥインク社である。

■先頃開催された東京国際ブックフェアの会場で、試作品の電子ペーパーを見てみた。なるほど高精細でコントラストも高く、液晶に比べればはるかに見やすい。ただ、多くの人が期待していた「紙のような」フレキシビリティとはほど遠く、ごく普通の電氣的な表示装置である。手のひらの中で折り曲げられた電子ペーパーの写真を、雑誌などでよく見るが、ペースがプラスチックだから当然かなり堅い。会場で担当者聞いたところ、写真を撮るためにかなり力強く握っているそうである。

■今はカラー液晶の全盛である。しかし、安く多量のカラー印刷ができるからといって、文字中心のコンテンツを色刷りするとはまざらない。電子ペーパーのように文字がきれいに読めるブラウザは、潜在的な需要がある。要は電子ペーパーでこそ可能なコンテンツを開発していくことである。

(フリーイング・デジタル)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

158-0082 世田谷区等々力 6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学 4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会

151-0063 浜谷区富ヶ谷 2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル 3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市築音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会 (準会員)

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会 (準会員)

301-8555 龍ヶ崎市長平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会 (準会員)

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会 (準会員)

662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-5233 (内線 3475) FAX 0798-53-9592